

できるかなじゃないよ、やるんだよ

新 井 純

奨励者紹介〔あらい・じゅん〕

日本キリスト教団世光教会牧師

世光保育園園長

さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。そのうち、時もだいぶたったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買に行きましょう。」これに対してイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめて来て、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」そこで、イエスは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。人々は、百人、五十人ずつまとまって腰を下ろした。イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した。そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。パンを食べた人は男が五千人であつた。

(マルコによる福音書 6章 30—44 節)

2匹の魚と5つのパンを5000人の人々が食べて満足したというお話。そんな馬鹿な話があるか。いや、あつたんです。早速紐解いてみましょう。

舞台はガリラヤ湖のほとり。主イエスは弟子たちを人里離れたところへ送り出し、そこでひと休みさせようと思われました。弟子たちは、小舟に乗って湖に漕ぎ出して行きました。ところが、湖の反対側にも群衆が待ち構えていたのです。

この様子をご覧になった主イエスは、群衆を「飼い主のいない羊」のようだと思い、深く憐れまれます。憐れむというのは同情するというような意味をもつ言葉ですが、主イエスがこの言葉を使われる時、ギリシャ語では「同じ思いになる」という意味の言葉があてられます。つまり、主イエスは群衆の気持ちを察し、なるほど、私でもそうする、とても思われたのかもしれません。

どういふこと。群衆はどんな気持ちだったの。聖書はそうした群衆の気持ちを記していません。だから、想像します。おもに二つのことを考えてみました。

一つは、奇跡の目撃者になりたいという心理。主イエスがさまざまな癒しの御業、奇跡的な出来事を行

い、しかもそれを神の権威に頼らねばなし得ないことであるという噂が流れれば、ぜひともその目撃者になりたいと思ったでしょう。それは単にマジックを楽しむような、奇跡の目撃者になるということに留まらず、もしそれが本当に神の権威を携えた者にしかなし得ないと思えたなら、この業を行った目の前の人、まさに神様の権威を携えている、つまり神に等しい者、あるいは過去の有名な預言者に並ぶような存在であるわけで、そういう方ならぜひお会いしたいし、その奇跡を目撃したいと思うのは、誰でも沸き起こる思いでしょう。だから、主イエスに会いたい、あるいは近づきたいという動機はありそうです。

もう一つは、主イエスの御言葉を聞きたいということ。主イエスが語られる御言葉、すなわち神様のお話は、たとえを多く用いる、とてもわかりやすいものでした。それは、律法学者などの指導者たちが普段していたような難しい話ではないので、庶民にもなじみやすかったと思います。だったら、主イエスが現れた時に、その御言葉に触れたいと思うのは自然な成り行きです。

しかも、主イエスの語る御言葉は、律法にがんじがらめにされた祭司や律法学者のそれと違って、慰めに満ちたものだったに違いありません。あれをしてはいけない、これをしてはいけない、あれをしろ、これをしろ、ああでなければならぬ、こうでなければならぬ、そういう類の話や、それを元に「あなたは罪人だ」などと言われることもなかったでしょう。そうではなく、わかりやすく慰めに満ちたものだったとしたら、誰だって聞きたいと思うものです。

果たしてこうした想像のとおりかどうかはわかりませんが、主イエスのご自分を求めてくる群衆を憐れみ、その場で再び教え始められたのでした。

だいぶ時間が経ち、弟子たちは主イエスに「ここは人里離れた所で、時間もだいぶ経ちました。人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買に行きましょう。」と進言しました。弟子たちは休むどころか、群衆の食事の心配をしなくなりました。

主イエスはこうお答えになりました。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」。弟子たちは驚いて聞き返しました。「わたしたちが二百デナリオンものパンを買ってきて、みんなに食べさせるのですか」。これは質問ではなく、「はあ、何を言い出すのですか」という、少し呆れたような、そんな感じの言葉。というのも、1デナリオンは労働者1日の賃金に相当する金額ですから、200デナリオンということは年収の半分以上の金額であることがわかります。それは大金です。その金額に相当するだけのパンということは、とても多く大量のパンであることを意味します。そこにいた群衆の人数が、最後に「パンを食べた人は男が五千人であった」と記されているように、単純に5000人分の食料が必要ということです。

それを急に準備するのは、不可能です。スーパーやコンビニがある現代の私たちでさえ、それだけのパンやおにぎりを急に準備することは難しいでしょう。これは金額の問題だけでなく、物理的に無理だということをも意味します。つまり、読者は、主イエスがおっしゃっていることは無理なことなのだとすぐに悟ります。

すると、主イエスは弟子たちに手持ちの食料を確認させました。パンが5つと魚が2匹あります。紙芝居などでは子どもがお弁当を差し出したことになっていますが、これはルカによる福音書で、パンと魚を持っていたのが子どもだったという記述に由来するのでしょう。

主イエスは弟子たちに、群衆を組に分けて座らせるようお命じになりました。そこで、群衆は50人から100人程度の組に分かれて青草の上に座りました。そして、手持ちの食料を弟子たちに配らせました。する

と、そこにいた全員、男だけで5000人が満腹したということです。

高校生時代、宗教の授業で、「子どもが弁当を差し出したのを見て、大人たちも実は弁当を持っていた、それを分け合ったという想像もできる」という話を聞いて、なるほど、それならあり得るなと思いました。でも、そんな話だったのかな。

そんな疑問を長年思い続けてきて、ふと気づいたのです。御言葉は、命の糧、御言葉のパンと呼ばれます。これは、主イエスが荒野で断食をされた後、サタンの誘惑にあい、「空腹ならこの石をパンに変えて食べれば良い」と言われた時、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」（マタイによる福音書4章4節）と反論されたことに由来します。すなわち、私たちはこの肉の体を養うための食料としてのパンも必要ではあるけれども、それだけで生きているのではなく、むしろ心の栄養とでも言いましょうか、私たちの信仰を養う神様の御言葉こそ、私たちを真に生かす命の源となるのだということです。

そのことと、今日の箇所のごことは、よく結び付けられて語られてきたと思われます。ここで配ったのは御言葉のパンなのだと。

実際、その通りだと思います。ただ、もう一歩踏み込んでみると、興味深いことに気づいたのです。先ほども話しましたが、このパンを配った時、群衆は小グループに分けられていたのです。そうです、小グループになら声が届くのです。

主イエスがどんなに大きな声を張り上げたとしても、5000人もの群衆に向かって、皆が聞こえるような声を出すことはできません。ここは野外です。マイクやスピーカーなどもない時代、とてもではありませんが群衆に声を届ける方法はありません。これでは、主イエスがどんなに一生懸命、長時間にわたって話をしても、目の前の100人くらいに聞こえていたという程度でしょう。だとしたら、集まった大群衆はいつまで経っても何を話しているのか聞こえるはずもなく、自分たちが前の方に出ていける隙を伺い続けるだけなのです。

そこで、主イエスは群衆を小グループに分けさせました。そして、弟子たちが持っているパン、すなわち弟子たちが主イエスのそばで聴き続けてきて、覚えているであろう御言葉の糧を確認させます。それを食べ物に例えた時、パンが5つに魚が2匹、つまり食べて満足するに足るだけの食事分以上はあったということです。

主イエスは、弟子たちにその「食事」を携えていき、「あなた方が配りなさい」と群衆の元に遣わしました。弟子たちは、小グループに分かれた群衆の元へ行き、そこで各々自分の言葉で、御言葉の糧としてのお話を人々に語り聞かせたのでした。これなら、主イエス本人からではないけれど、群衆は御言葉を聞くことができたでしょう。そして、なるほどそういうお話か、と満足していくのです。そして、弟子たちがすべてのグループにお話をして回ったあとは、みんなが満腹していたのです。

さらに、残ったパン屑を集めたら、12の籠にいっぱいになったとあります。12とは、主イエスの弟子たちの人数と同じです。つまり、12人の弟子たち自身が、自らが語った御言葉によって、あるいはそれを受けて満足した人々によって、恵みに満たされていったということではなかったでしょうか。自分たちにも御言葉を分かち与えることができた、自分たちにもその大切な役割が担えた、この経験は、彼らに自信を与え、それはそのまま彼ら自身の恵みとなったに違いありません。

神様は、私たちにたくさんの賜物をくださっています。その賜物を用いて、その賜物を分かち合うことができた時、私たちも感謝と喜びに満たされます。ですから、「できない」「無理だ」そんな言葉を出す前に、チャレンジしてみてもはどうでしょう。

2021年6月30日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録